

## 葉月物語絵巻詞書注釈稿（中）

西 耕 生

は し が き

本稿は、かつて不十分ながら試みた小稿「葉月物語絵巻詞書注釈稿（上）」（『大阪女子短期大学紀要』第二十一号、一九九六年十二月）に続くものである。前稿では、葉月物語絵巻の詞書で現存する六つの断簡のうち、最初の二つの段について注釈を試みた。この稿では、つづく第三段・第四段の二つについて注釈を施そうとする。葉月物語の絵巻および詞書本文の底本には、『日本絵巻大成』（中央公論社版）所収の複製を用いた。詞書の「翻刻」に对照した「釈文」は歴史的仮名遣をもって示し、句読点等を付した。なお、便宜上、詞書本文にアラビア数字で第一段から第六段までの通しの行数を施して、「語釈」および「現代語訳」と対照させた。

前稿からかなりの時日を読んでおり、この間には、いわゆる中世王朝物語に関する入門書や翻読本文が提供され、また、全文口語訳を具えた注釈書のシリーズも刊行されはじめている。主たる資料を掲げれば、おおよそ次のごとくであろう。

【入門書】

a 大槻 修・神野藤昭夫編『中世王朝物語を学ぶ人のために』世界思想社、一九九七年九月

【本文・注釈】

b 市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』〈全七巻・別巻二〉笠間書院、一九八八年九月～二〇〇一年十一月

c 市古貞次他編『中世王朝物語全集』〈全二十二巻・別巻二〉笠間書院、一九九五年五月～現在刊行中

【研究書】

d 大槻 修『中世王朝物語の研究』世界思想社、一九九三年八月

e 神野藤昭夫『散逸した物語世界と物語史』〈中古文学研究叢書6〉若草書房、一九九八年二月

f 田淵福子『中世王朝物語の表現』世界思想社、一九九九年三月

g 辛島正雄『中世王朝物語史論』〈上巻・下巻〉笠間書院、二〇〇一年五月・九月

このような現状において、あえて稿を起すことはいささか憚られるのであるけれども、やはり前稿と同じように、この絵巻の詞書に注釈を施すことを通して物語史に対する私なりの理解を深める機縁とすべく、疎略ながら成したものである。もとよりこの稿は定稿に至っていない。ささやかながら提示した異見にも、誤謬は免れがたいであろう。前稿ともども、ここに、大方の御批正・御教示を切にお願い申しあげる次第である。

▼第三段

《翻刻》

まことものわすれしてけりはつ

44 「まこと、物忘れしてけり。恥

かしき人こんといひしを人／＼心えて

45 かしき人、『来ん』と言ひしを。人々心得て、

《釈文》

はしにまでとのたまへはたれはかりに  
 かとこ宰相中将などあさけのすかた  
 はつかしうてこれかれいたくひき  
 つくろひてゐなミたるにそのをり  
 のはりまのかミはときの蔵人にていと  
 わかくきよけにひきつくろひて  
 まいるをみ給て少将とてすくれたる  
 わか人を御てつからをしいたしてあれ  
 とりいれよとの給ふはふミなりけり  
 てつからあふきいてたまふそらたきもの  
 もわか御にほひのそへハにやつねより  
 もくゆる心地するにとりいれたる  
 御ふみまつかさねのうすやうにつゝ  
 まれたるさまもなへてならぬを  
 殿とり給てうへにこれみたまへした  
 りかほなる事なれとことさらにも  
 などかとこそおほゆれとのたまふを  
 なにそとあやしくて見たまへは

46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63

端に待て」と宣たまへば、「誰ばかりに  
 か」と、小宰相・中将など、朝明の姿  
 恥かしうて、これかれ、いたく引き  
 繕ひて居並みたるに、その折  
 の播磨守は時の蔵人にて、いと  
 若く清げに引き繕ひて  
 参るを、見たまひて、少将とて、優れたる  
 若人を御手づから押し出だして、「あれ、  
 取り入れよ」と宣たまふは、文なりけり。  
 手づから扇子出でたまふ空薫物  
 も、我が御匂ひの添へばにや、常より  
 も燻る心地するに、取り入れたる  
 御文、松襲の薄様に包  
 まれたる様もなべてならぬを、  
 殿、取りたまひて、上に「これ、見たまへ。した  
 り顔なる言なれど、殊更にも。  
 『などか』とこそおほゆれ」と宣たまふを、  
 「何ぞ」と、あやしくて見たまへば、

- ゆくすゑをはるかにおもひはしむれば  
くれまつさへそひさしかりける 64  
行く末を遙かに思ひ始むれば  
暮れ待つさへぞ久しかりける 65  
こはたかそとおもひよるへき事なら  
「こは、誰がぞ」と、思ひ寄るべき言なら 66  
ねはあやしとおほしたるをとの  
ねば、「あやし」とおぼしたるを、殿、 67  
うちゑみて見しりたまはずや  
うち笑みて、「見知りたまはずや」 68  
とのたまふほとに  
と宣たまふほどに…… 69

## 【語釈】

44◇ものわすれ<sup>レ</sup>うっかりして忘れること。失念。「心得ていふは誰もをかしき中に、女などこそさやうの物忘れはせね、男はさしもあらず」(三卷本枕草子・一五六段)、「あだなりと思ひしかども君よりはものわすれせぬ袖のうは露」(新古今集・恋五・一三四二、道信朝臣)、「健忘 モノワスレ」(文明本節用集)。

44◇恥かしき人「来ん」と言ひしを<sup>レ</sup>「恥かし」は、こちらが気後れするほど優れているさま、立派なさま。「人々(御簾ノ)うち<sup>レ</sup>に心してあれ。我<sup>わが</sup>つかさのすけも、恥<sup>く</sup>かしき人ぞや。左大将のみこ、左のおとどのみこぞかし。いと恥<sup>く</sup>かしきあたりなり」(うつほ物語・俊蔭)。「来ん」というのは、男が女の許へ行こう、という意思を述べたもの。「今来ん<sup>きき</sup>と言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」(古今集・恋四・六九一、素性法師)。

47◇小宰相・中将<sup>レ</sup>女房たちの名。

47◇朝明<sup>あまけ</sup>の姿<sup>つとめて</sup><sup>レ</sup>「翌朝、少し寝過ぐしたまひて、日さし出づるほどに出でたまふ。朝明<sup>あまけ</sup>の姿は、げに人のめできこえむもことわりなる(光源氏ノ)御ありさまなり」(源氏物語・夕顔)、「若き人の御心に染みぬべく、たぐひ少なげ

なる(匂宮ノ)朝明の姿を見送りにて、なごりとまれる御移り香なども人知れずものあはれなるは、されたる(中君ノ)御心かな(源氏物語・総角)。本来、女の許から朝帰って行く男の姿をいう歌語。「我背子之朝明形吉不見今日間恋暮鴨」(万葉集・卷十一・正述心緒・二八四一、よみ人しらす)、「朝鳥早勿鳴吾背子之旦開之容儀見者悲毛」(万葉集・卷十一・寄物陳思・三〇九五、よみ人しらす)古今六帖・第六八・鳥・鳥・四四七八、第三句異伝「わぎもこが」。平安時代になると、古今六帖のように女の姿をいう異伝も生まれていることに留意すれば、この場面の「朝明の姿」を女房たち自身のそれと理解することもできるか。

48◇引き繕ひて居並みたる||「引き繕ひて」は、身嗜みを整えて。「風につきて吹き来る匂ひの、いとしくうち薫るに、ふとそれとおどろかれて、御直衣たてまつり、乱れぬさまに引き繕ひて出でたまふ」(源氏物語・総角)。

49◇その折の播磨守は時の藏人にて||「明石入道ノ噂ヲ」かく言ふは、播磨の守の子の、藏人より今年かうぶり得たるなりけり(源氏物語・若紫)と紹介されるのは、光源氏の供人である良清。ここでは、女君に恋文を持参するところから主人公格の人物かとも思えるが、「時の藏人にて」とわざわざ補足説明されていることを慮ると、或いは天皇(クラスの人物)の手紙を持参したとも考えられる。この段の絵に描かれた、笏を持って威儀を正している姿から、その文使いとしての重々しさが感じられる。

52◇少将とて、優れたる若人||「少将」は女房名。「とて」の用法については、例えば「兵部とて、をかしま方などもかたきが、さすがに人などにさしまじり」(能因本枕草子・二七一段)、「物怪にいたう悩めば、移すべき人とて、大きやかなる童の、生絹の単衣、あざやかなる袴長う着なして、ゐざり出でて」(三卷本枕草子・三二五段)を参照。

53◇御手づから押し出だして||後出する「殿」(60・67)自身の行動。

55◇手づから扇ぎ出でたまふ空薫物||同じく「殿」(60・67)自身の行動。「空薫物」の用例は「燻る」(57)の項参

照。

56◇我が御匂ひひ「殿」(60・67)の薫物の香り。「薫ガ」あやしきまで人の咎むる香に染しみたまへるを、兵部卿の宮なむ、異事よりも挑ましく思して、それは、わざとよろづの優れたる移しを染めたまひ、朝夕のことわざに合せ宮み……わざとめきて、香にめづる思ひをなむ、立てて好ましようおはしける」(源氏物語・匂兵部卿)。

57◇燻るる空薫物がくすぶってほのかな匂いが立つ。「そらだきもの、いとけぶたうくゆりて、衣の音なひ、いとほなやかに振舞ひなして、心にくく奥まりたるけはひはたちおくれ、今めかしき事を好みたるわたりにて」(源氏物語・花宴)。「薫へ上薫 タキ牛ス カホル カウバシ フスフ ニホフ ククル……」(類聚名義抄・僧上)。

58◇御文、松襲の薄様に包まれたる様様「まつがさね。マツガサ子ハ。アラキヲウヘニテアルヲ。ミルヤウニオボユルハヒガゴトカ。すき。もえぎのにはひたる三。くれなるのひとへ」(満佐須計装束抄・三・女房装束事「羣書類従・第八輯、八〇頁」)、「松重。面青。裏紫。四季通用。」(装束抄・衣色「羣書類従・第八輯、二四七頁」)などが参考となる。「春宮は……御文奉らせたまふ。松襲松襲の紙、紅梅のいまだ開けぬだに付けさせたまへり」(苔の衣・巻一)。

60◇殿殿第一段の「殿」(2・28)と同一人物か。

60◇上上この呼称からすれば「殿」(60・67)の妻と考えられる。第一段に見えた女君と同一人物か。

60◇したり顔なる言なれど、殊更にもも「したり顔なる言」は、得意顔な言葉。手紙の中の言い回しを指して言う。「殊更にも」は、何やら意味ありげな書きぶりであるという批評。「源氏ガ」何心もなく引き出でて御覽ずるに、男の手なり。紙の香などいと艶に、殊更めきたる書きざまなり」(源氏物語・若菜下)は、柏木から女三宮宛の手紙を偶然見た光源氏を描写している。その書きざまから、恋文だと察した場面である。

64◇行く末を遙かに思ひ始むれば暮れ待つさへぞ久しかりけるも「あなたと私の仲の)将来を遙か(永遠に続くも

の)に思い始めたので、(あなたにお目にかかれる)夕暮を待つことまで(時間の経つこと)が長く思われます」という内容の、天皇(クラスの人物)からの手紙。「位の御時、皇太后宮初めて参り給へりける後朝につかはしける院御製/万世よろづを契りそめつるしにはかつがつ今日の暮れぞ久しき」(千載集・恋三・七九七)とよむ和歌と同じく、永遠に長かれと思うがゆえに夕暮あうまでの時間の待ち遠しい長さ——愛するがゆえの矛盾を訴える。「松襲の薄様に包まれ」ていたことを踏まえ、「待つ」に「松」を利かせる。全体として「松」の縁語——「末」「はるか」「久し」を用いている。「久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しきものにぞありける」(古今集・恋五・七七八、よみ人しらず)。「行く末の遙かなるべきしるしにはまづ年かへる空にかすめよ」(相模集・四二五)。  
69◇と宣たまふほどに||言いさした形とも説明できそうだが、おそらく本来はこの直後に何らかの文言が続いていたと推察される。或いは、詞書に抄出する際、意図して省かれたのかも知れない。いまは不明とするよりほかない。

【現代語訳】

- 44 「本当に、物忘れしていたことだ。立
- 45 派な人が、『来よう』と言ったのを。人々、心得て、
- 46 端に待ちなさい」とおっしゃるので、「どれほどの人かし
- 47 ら」と、小宰相・中将などは(やって来るはずの男君の)朝明の姿が
- 48 恥かしくて、こちらの女房もあちらの女房も、ひどく身嗜みを
- 49 整えて座り並んでいると、その当時
- 50 の播磨守は時の(天皇に仕える)蔵人で、とても

- 51 若く小綺麗に居住まいを正して
- 52 参上するのを、(殿は) 御覧になって、少将といって、優れた
- 53 若い女房を御自身の手で押し出して、「あれを、
- 54 取り入れなさい」とおっしゃるのは、手紙なのだった。
- 55 自らの手で扇ぎ出しなざる空薫物
- 56 も、御自分の(焚き染めた)匂いが加わった所為かしら、普段より
- 57 も燻る気持がするところに、(少将が) 取り入れた
- 58 御手紙は、松襲の薄様に包
- 59 まれている様子も並大抵でないのを、
- 60 殿は、お取りになって、上に「これを、御覧なさい。得意
- 61 顔な言葉だけれど、わざわざ特別にも。
- 62 『どうして(これほどまで)』とこそ思われるね」とおっしゃるので、
- 63 (上は)「何です」と、いぶかしくて御覧になると、
- 64 (あなたと私の仲の) 将来を遙か(永遠に続くもの)に思ひ始めたので、
- 65 (あなたにお目にかかれる) 夕暮を待つことまでが(待ち遠しく)長く思われます。
- 66 「これは、誰のです」と、思いあたることのできる言葉でない
- 67 ので、(上が)「いぶかしい」とお思いなのを、殿は、
- 68 少し微笑んで、「お見知り(置き)でないのか」



▼第四段

《翻刻》

宮いまはうちとけて御らむするに  
 ことのほかなる女きみの御みまさりを  
 いとかばかりはさらに思かけざり  
 つるわざかなと御めおとるきておほ  
 しめさる八月廿日よひにもなりぬれ  
 と露よりもこよなくをきおとり  
 ぬへきにやかりにたちてもはなた  
 れぬあふきのかせも秋とハおほえぬ  
 ほとにをしこりてなみたる女房  
 とものすかたたくひなくこはかくに  
 はかなりつる事とも見えずめ  
 あやにあさましきまでみゆるに御前  
 のかたをみやれば木丁にまとはれてわづかに  
 御そのつまはかり見えてゐたまへりなへて

《釈文》

70 宮、今はうちとけて御覽するに、  
 71 事の外なる女君の御見優りを  
 72 「いと、かばかりは、さらに思ひ懸けざり  
 73 つるわざかな」と、御目驚きて思  
 74 し召さる。八月廿日ツマ余日にもなりぬれ  
 75 ど、露よりもこよなく置き劣り  
 76 ぬべきにや、かりに立ちても離れた  
 77 れぬ扇の風も、秋とはおほえぬ  
 78 ほどに、押し凝りて並み居たる女房  
 79 どもの姿たぐひなく、こはかく俄  
 80 かなりつる事とも見えず、目も  
 81 あやに、あさましきまで見ゆるに、御前  
 82 の方を見やれば、几帳にまとはれて、わづかに、  
 83 御衣の棲ばかり見えて居たまへり。なべて

- ならぬくれなるのうちあはせにさうかんの  
 をミなへしの御そにふせむれうのはきのこうち 84  
 きゝなし給へる人からにやたくひなく見 85  
 ゆるに宮のもちたまへるあふきして 86  
 にはかにさとうちあふきゝこえたまへる 87  
 御ひたひかみのみたれかゝれるなをめ 88  
 つらしきまでおかしき人の御ありさま 89  
 なりや 90  
 ならぬ紅の打袷に、象眼の  
 女郎花の御衣に、浮線綾の萩の小桂  
 着なしたまへる、人柄にや、類ひなく見  
 ゆるに、宮の、持ちたまへる扇して、  
 俄かに、さとうち扇ぎきこえたまへる、  
 御額髪の乱れ掛かれる、なほ、め  
 づらしきまでをかしき、人の御ありさま  
 なりや。

## 【語 釈】

70◇宮Ⅱこの段に初めて見える人物。直後の文から、「女君」(71)と恋愛関係にあることが判る。

70◇今ほうちとけて御覽するⅡ男が女を「うちとけて見る」という行為には、その男女が肉体関係にあることを含んでいる場合が多い。「(源氏ガ) 見たまふ限りの人はうちとけたる世なく、引き繕ひ側めたるうはべをのみこそ見

たまへ、かくうちとけたる人のありさま垣間見などは、まだしたまはざりつることなれば」(源氏物語・空蟬)。

「見たまふ限りの人」とは、光源氏と愛人であることを言う表現。「門の前よりわたるとて、うちとけたらむを見む、と言ひたるに、書きつけて返しけり／なほざりのたよりに訪はむ人ごとにうちとけてしも見えじとぞ思ふ」(紫式部集・一〇七)。「うちとけたらむ」(Ⅱ気楽に寛いだ)様子を伺おうと言う、おそらくは夫と思われる男からの言葉に、切り返した応答。

71◇女君Ⅱ第三段と係わらせて考えれば、「殿」(60・67) 夫妻のむすめかとも思われる。

71◇御見優りⅡ「見劣り」の反意語。目にすることで一層、対象の美しさを知覚すること。「御」をつけて「女君」に対する敬意を表す。「何ごとにつけても、見優りはかたき世なめるを、つらき人しもこそと、あはれにおぼえたまふ人(朝顔)の御心ざまなる。」(源氏物語・葵)、「またうち返し、見優りするやうもありかし。手探りのたどたどしきに、あやしう心得ぬこともあるにや。見てしがな」と思ほせど、けざやかにとりなさむまばゆし、うちとけたる宵居のほど、(源氏ハ) やをら入りたまひて、格子のはさまより見たまひけり。」(源氏物語・末摘花)。

74◇八月廿日余日Ⅱ第一段冒頭の「八月十余日」と関連あるか。但し、同年内である明証もない。

75◇露よりもこよなく置き劣りぬべきにや、かりに立ちても離たれぬ扇の風も、秋とはおぼえぬほどにⅡ直前に「八月廿日余日にもなりぬれど」とあるところから、陰曆八月下旬すなわち秋も闌であるにも係わらず残暑が厳しいことを、歌語的表現に拠って綴る。「置き劣る」は「置きまさる」の対。「七月一日」と詞書に明示して詠まれた「秋来れど扇の風はやまずして露には常に置き劣りけり」(大齋院前御集・一四一)を引歌とする表現か。ここは「露よりも……置き劣りぬべきにや、かりに立ちても離たれぬ扇の風も」と前後を因果関係で結び、「露よりも……置き劣る」くらいだという原因を叙べることで秋風が吹かぬことを暗示して、「(扇の)風も、秋とはおぼえぬほどに」と後に続けている。「添へてやる扇の風し心あらば我が思ふ人の手をな離れそ」(後撰集・離別羈旅・一三三〇・よみ人しらず)、「七月一日なりけり、扇と秋野といふ心をよまむとて、進／扇のみ手にかかりては思ほえでいさ白露は置きやしつらむ」(大齋院前御集・一三九)。後半の「かりに立ちても……」という箇所にも何らかの引歌がありそうだけれども、未詳。「立ちても離たれぬ扇の風」の「ても」に「手も」を響かせるか。なお、「かりそめに立ち離れぬと思ひしはやがて別れの旅にぞありける」(親盛集・一一〇)、「故郷の一村すすき秋来ともかりに立ち訪ふ

人や無からん」(源家長日記・一六八)などに類似する縁語の用法が認められる。

78◇押し凝りて並み居たる女房どもの姿||「押し凝りて」は、身体を寄せ合うようにして一所に集まっている様子という。「御几帳の背後、障子のあなたなどの開きとほりたるなどに、女房三十人ばかり押し凝りて、濃き薄き鈍色どもを着つつ、皆いみじう心細げにてうちしほたれつつ集りたる」(源氏物語・葵)。第四段の絵では、左下に二人の女房が描かれている。「押し凝りて並み居たる」という表現にはややそぐわない象徴的描写である。

79◇かく俄かなりつる事とも見えず||「宮」が「女君」の許へ訪れたのが前触れなく唐突であったことを指すか。

81◇御前の方||「女君」(71)の居所。

82◇見やれば||尊敬語が用いられていないところから、視点は語り手だとも考えられるが、前後の文脈を慮れば、寧ろ「殿」の視線が語り手のそれに合致したものと理解すべきであろう。

82◇几帳にまとはれて||几帳にくるまって。「(若紫ノ)君は御衣にまとはれて臥したまへるを」(源氏物語・若紫)、「嬰へカ、ル 禾ツラフ メクル アク カク ナク マトハル ヤドル」(類聚名義抄・佛中)。なお、「まつわりつく」意の下二段自動詞——「(猫ガ)姉おととの中につとまとはれて」(更級日記)とは異なる。

83◇御衣の棲ばかり||「いとほのかに御衣のつまばかりを見奉りし春の夕べの、飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまを」(源氏物語・若菜下)。垣間見した女三宮の姿を思い出す柏木の心中。「几帳のきは少し入りたるほどに、桂姿にて立ちたまへる人あり。階より西の間の東のそばなれば、まぎれどころもなくあらはに見入れらる。紅梅にやあらむ、濃き薄き、すぎすぎに、あまた重なりたるけぢめ華やかに、草子のつまのやうに見えて、桜の織物の細長なるべし。……夕影なれば、さやかならず、奥暗きこちするも、いと飽かず口惜し」(源氏物語・若菜上)。

84◇なべてならぬ紅の打拾ヒ。「打拾」は、「砧ツツで叩いてつやを出した裏付きの衣」(日本国語大辞典)と説かれる。「紅の打ちたる御衣三重が上に」(三卷本枕草子・一〇〇段)などが、具体的な言い方か。「女房車ども、かんの殿の上臈ハチ三車は、紅ベニのうちあはせに、黄櫨ハシの織物」(うつほ物語・楼上上)、「(仲忠ノ)大将、白き綾の单衣ひとへ、紅ベニのうちあはせ、脱ぎ垂れたまへり」(うつほ物語・楼上下)。

84◇象眼の女郎花の御衣ヒ。「象眼」は、文様の縁を金銀泥や色々の糸で縁取り際立たせたもの。「紅の御衣ども、よろしからんやは。中に唐綾の柳の御衣、葡萄染えびぞめの五重襲いつへがさねの織物に、赤色の唐の御衣、地摺ぢすりの唐の薄物に、象眼く重ねたる御裳もなどたてまつりて、物の色などはさらになべてのに似るべきやうもなし」(三卷本枕草子・二六三段)とあるのは、中宮定子の姿。「女郎花」の色目は「をみなべし／おもてをみなべし。うらみなあをし。くれなるのひとへ。」(満佐須計装束抄・三・女房装束事「羣書類従・第八輯、八六頁」)、「一女郎花のひとへ重ね。おもてたて青ぬき黄色。うらあをし。紅ベニのうちあはせ。赤いろのこうちぎ」(女官飾抄・五月五日より秋までの衣の色「羣書類従・第八輯、三六五頁」)、「女郎花經青。緯黃。裏青。或裏不」(装束抄・衣色「羣書類従・第八輯、二四六頁」)。

85◇浮線綾の萩の小桂ヒ。「浮線綾」は、模様を浮き織りにした綾織物。「冬。面浮線綾粉張盤」(飭抄・上・下襲「羣書類従・第八輯、一二七頁」)。「萩」の色目は、表蘇枋・裏青という。「七月七日よりきがへする／はぎうすいろにあをたて。したにあをきかさね／をみなべしきなるにあをたて。したにあをきかさね／オミナベシナドハ。六月ギラムノ御エマ。ナドヨリキル。ツ子ノコトナリ」(満佐須計装束抄・三・女房装束事「羣書類従・第八輯、八五頁」)。「萩經青。緯蘇。芳。裏青」(装束抄・衣色「羣書類従・第八輯、二四六頁」)。「女房の装束きうどく、裳も、唐衣からぎ、折ひに合ひ、たゆまでさぶらふかな。御簾のそばの開きたりつるより見入れつれば、八九人ばかり、朽葉くはの唐衣、薄色の裳もに、紫苑むらさき、萩はぎなど、をかして居並みたりつるかな」(三卷本枕草子・一三八段)とあることを参看すれば、この段に

描かれる「女郎花の御衣」「秋の小桂」といった色目の女君の装束には、陰曆八月下旬とはいえ残暑の折に合ったものが選ばれている。女君の洗練された身嗜みを窺わせる。「小桂」は、からぎぬ唐衣よりも略装で上着の上に掛けて着る。

「殿の上は、裳の上に、小桂をぞ着たまへる」(三卷本枕草子・二六三段)。

90◇人の御ありさまⅡ「人の御ありさま」で一語。ここは「女君」(71)の様子。

### 【現代語訳】

70 宮は、今はうちとけて御覧になるにつけ、

71 予想外な女君の御見優りを、

72 「とてもこれほど(の美しさ)とは、全く予想して

73 いなかった事だな」と御目も驚くばかりお思い

74 になる。八月廿日余りにもなっているのだけ

75 ど——露よりも格段に置き劣る

76 にちがいない所為なのか、仮に(涼しい風が)立ったとしても(残暑のため)手離

77 せない扇の——風も、秋とは思えない(くらい暑い)

78 時分に、押し(合い)固まって並び座っている女房

79 たちの姿は類いなく、これは(宮の訪問が)こんなに突然だっ

80 た事だとも見えず、(きちんと居住まいを正している女房たちの衣裳が)目も

81 眩むほどに、呆れるくらいにまで(きらびやかに)見えるのに、(一方、女君の)御前

- 82 の方を見やると、几帳に（すっぽり）くるまって、少し、  
83 御召し物の襟だけが見えて座っていらっしゃる。並一通り  
84 でない紅の打袷に、象眼の  
85 女郎花の御衣に、浮線綾の萩の小  
86 桂を着こなしておられる（女君の）御様子、人柄（によるの）であろうか、類いなく見  
87 えているのに、宮が、お持ちになっている扇を使って、  
88 急に、さっとうち扇子申し上げなさる（女君の）  
89 御額髪が乱れ掛かっているのも、やはり、めずら  
90 しいくらいにまですばらしい、人の御様子  
91 だわ。

#### 附記

のこる第五段・第六段の注釈については、紙幅の関係により続稿とする。〈平成十三年大雪〉